所謂「人生道中図」とその変容

腮尾　尚子

それでは、始めさせて頂きます。お手元のレジュメは、４枚１組になって居りますので、ご確認下さい。

まず、レジュメ１枚目の《１》「人生道中図」と関わりある先行研究、という項をご覧下さい。

江戸時代後半期には、一枚刷の地図の体裁を借りて、人間の一生を表現した一種の戯画が、次々に版行されて居ります。これは、地図の中に短冊形をあしらい、例えば「孝行山」「心中谷」「正直坂」「手習橋」等といった、人生に関係ある名称を書き込んだものです。こうした戯画のグループを一括して呼ぶ名称として、本発表では、山下和正氏に倣い、「人生道中図」という名称を用いることに致します。

山下氏は、古地図研究の視点から、道中図の中の一つのバリエーションとして、「人生道中図」というジャンルの存在を既に明言されています。資料①をご覧下さい。山下氏は、『江戸時代古地図をめぐる』の中で、道中図を分類し、その中に「人生道中図」という一類を位置付け、その定義を述べておられます。

資料②に挙げた著書『地図で読む江戸時代』でも、①の分類や定義はほぼ引き継がれています。

一方、国文学研究においては、これまで「人生道中図」という図そのものを主とした研究は見当たらないようです。しかしながら、資料③をご覧下さい。中野三敏氏が、沢田東江の年譜稿において、宝暦６年、沢田東江25歳の時の作品『迷所邪正案内』について解説し、その中で、この作品に関連する一枚刷に

ついても言及しておられるのが、「人生道中図」研究にとって、非常に示唆的な内容となっています。中野氏は人生の経路を地図に見立てるという趣向の戯作として、一枚刷を含む、次の4種を挙げておられます。

まず第一は、宝暦6年1月刊行の、沢田東江作『迷所邪正案内』。これは、全1冊の滑稽本です。そして第二は、それと同じ1月刊行の、飛雄亭という作者による『人間一生善悪両道中独案内』。これは、小冊子と付録の図とがワンセットとなった作品です。そして第三は、同年2月刊行の、作者不明の「人間一生道中図」という一枚刷。そして第四は、同年1月に刊行されたと伝えられる、これも作者不明の「善悪道しるべ」という一枚刷です。

これらの内、第一から第三については、この後改めてふれることにしています。

尚、中野氏が先行研究として挙げておられる、水谷不倒氏の『選択古書解題』の関係箇所を、参考までに、資料④として載せておきました。

それでは次に、《2》いろいろな「人生道中図」、という項をご覧下さい。ここでは、《1》の先行研究を参考にしながら、これまでに取り上げられたことのなかった図も併せて、色々な「人生道中図」の例をみて行きます。

まず①をご覧下さい。この『迷所邪正案内』という書の巻頭には、2丁半にわたる口絵があります。その図版は、レジュメの先の方に、《2》①の口絵A・B・Cとして、載せてありますので、ご覧下さい。

この口絵A・B・Cの内、AとBだけに、手で彩色が施されてあり、A・Bのそれぞれの図柄は、一続きの「人生道中図」を右半分と左半分とに分けたかのようなものになっています。まだ推測の域を出ませんが、もしかすると、この口絵A・Bの原型となった、折本型、つまり横長の形の「人生道中図」の一種が、『迷所邪正案内』以前に存在していたかもしれない、という可能性が考えられます。

この口絵A・Bに続いて、すぐ後に、「六道の辻」と呼ばれる部分だけをクローズアップした、口絵Cがあります。この口絵Cは、おそらく一枚であった

原図を二分割したことによって、もともと原図の中央に位置していた六道の辻の存在感が非常に希薄になったので、それを補強するために用意されたものと思われます。つまり、『迷所邪正案内』の読者が口絵AからBへと、丁をめくるのに紛れて、「六道の辻」の姿を見過ごす、などということのないように、念をおす役割を担っていると考えられます。

次に、図版《2》②付図、をご覧下さい。これは、『人間一生善悪両道中独案内』という小冊子とワンセットになっている、付録の図です。水谷不倒氏も述べているように、『人間一生善悪両道中独案内』の小冊子と付図は必ずしも両方揃った形で残っているとは限りません。現在、国立国会図書館や狩野文庫の『人間一生善悪両道中独案内』には付図がついておらず、管見の及ぶ範囲で、付図が残っているのは、東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本のみです。尚、加賀文庫には、付図だけでなく、付図の袋まで所蔵されていますが、この袋は後人による手製のようです。袋には「人間一生善悪両絵図」という手書きの文字があります。

次に、図版《2》③をご覧下さい。この一枚刷は、題簽や袋などが失われたらしく、現状では題を示す物が何も付いていませんが、刊記から推測しますに、中野三敏氏が《1》の③で「人間一生道中図」と呼んでいる一枚刷に相当すると考えられます。レジュメ1枚目の、《2》の資料③をご覧下さい。この一枚刷の刊記において、出版者名が大坂の書林「野村文煥堂」となっていますが、これは冨士屋長兵衛のことであり、『大阪出版書籍目録』には、この冨士屋長兵衛が宝暦6年2月に「人間一生道中図」という一枚刷の出版を出願し、その後これを「諸人一代道中図」と改題して、同年3月に再び出願した、という記録があります。従って、宝暦6年2月、という刊記を持つ③の一枚刷は、もともと「人間一生道中図」という題を持っていたと考えられます。

次に、図版《2》④をご覧下さい。この図には刊記がありませんが、この図と全く同じ図柄の図が、山下和正氏の『地図で読む江戸時代』に掲載されており、その図の枠線の外側には「宝暦六丙子二月出来／寛政六甲寅三月再板」と刷られています。この一枚刷の図柄はおそらく、先程みた、③の一枚刷を意識

し、それに似せて描かれたものと考えられます。

次に、図版《2》⑤をご覧下さい。この図は、山下和正氏の『江戸時代古地図をめぐる』に紹介されたことのある図です。私は、この図の最大の特色として、画面の左肩に、心学の施印らしき絵札のようなものがはめ込まれていることに注目しております。「施印」とは、心学者が心学の教えを広めるための教材として、無料で配布した小型の一枚刷です。もしかすると、「人生道中図」そのものも、心学の施印として使われることがあったのかもしれません。この図と関連する資料を《5》に載せましたが、説明する時間的余裕がありませんので、《5》については、後でお目を通しておいて下さい。

次に、図版《2》⑥をご覧下さい。他の「人生道中図」では、「六道の辻」から6本の道が放射状に長く伸びていますが、この図の中の6本の道は大変短く、少し伸びた所ですぐに平原の中に姿を消しています。そして、その平原全体を、6つの区画に区分するかのように、川が放射状に流れており、道よりもむしろ川の方が目立つように描かれています。このような、平面を放射状に伸びる線で等分するという構図は、「円頓観心十法界図」などの仏教絵画の影響を受けたものではないかと思われます。「円頓観心十法界図」については、本発表で詳しく説明する余裕がありませんので、後で《6》をご覧になっておいて頂ければと思います。

以上、色々な「人生道中図」の例を見て来ましたが、今後の調査によってもっと多種多様なバリエーションが見いだされる可能性は高いでしょう。今まで、一般の古地図という枠組からも、また文学作品という枠組からも外れた存在であるためか、研究対象としてはあまり注目されて来なかった「人生道中図」ですが、この図が江戸時代の人々の心をとらえ、当時広く流布していた、ということが確かである以上、「人生道中図」を研究する意義は大変大きいのではないかと思います。

それでは、レジュメの1枚目に戻って頂きまして、《3》一枚刷「人生道中図」の流行、という項をご覧下さい。ここには、「人生道中図」が如何に人気

を博していたか、ということを伝える資料を並べてあります。

まず、資料①をご覧下さい。『諸人一代道中図之解』という書は、「人生道中図」を構成している山や川など、各部について詳しく解説したものです。先程《2》の③の資料の中に、大坂の「冨士屋長兵衛」という名前が出ていましたが、序文・跋文によれば、この書は、その冨士屋長兵衛の七回忌にあたって、息子の冨士屋長兵衛が故人の遺稿をもとに出版したものだということです。挿絵に添えられた注記に、「諸人一代道中之図、前（さき）ニ出板、モトメ見（ル）可（シ）」とありますが、ここにいう「諸人一代道中之図」とは、「人間一生道中記」を改題して宝暦6年3月に出版の出願をしたという、一枚刷の「諸人一代道中図」を指すものでしょう。巻末の出版目録をみますと、同じ「諸人一代道中図」という題名の、冊子本も存在したらしいことがわかります。

次の②は、同じく「諸人一代道中図」という題名を持つ一枚刷が、京都でも刊行されていたことを示す資料です。

③の資料は、宝暦6年に刊行された『人間一生善悪両道中独案内』が、好評に付き、再版されたことを示しています。

④に挙げた『絵本諸人道しるべ』という書は、①と同様、「人生道中図」の各部を詳しく解説した冊子本です。その序文には、世に「人間一生道中記」という図があり、人気を博している、ということが記されています。巻末の出版目録には、「人生道中図」やその解説書の名が連なっています。これらは京都版です。

次の⑤に挙げた『人間一生独案内善悪道中記』という書は、「人生道中図」の構成要素である山や谷などの数を大幅に増やして、冊子の形に仕立てたものです。その序文の中に、小冊子と絵図を併せ見るスタイルの、飛雄亭作、宝暦6年刊行の「善悪道中記」なる作品名がみえていますが、これは『人間一生善悪両道中独案内』のことであろうと考えられます。この序文によれば、飛雄亭の「善悪道中記」の好評をうけて、その後、同様のスタイルの「大通独案内」という作品も作られたということですが、この作品については現在、所在が分かりません。

次の⑥をご覧下さい。『歌舞伎年表』には、「人間道中記」という狂言名がみえており、宝暦6年10月、京都で上演されたとされています。どのような筋なのかは不明ですが、上演の時期からみても、一枚刷「人生道中図」の刊行と何らかの関連をもっているように思われます。

以上、「人生道中図」の人気の高さを伝える資料を見て来ましたが、それにしても、「人生道中図」の、特にどこが、人々にそれほどアピールしたのでしょうか。この問題について、最後に考えてみたいと思います。

《4》「六道の辻」という言語表現と「六道の辻」の画像、という項をご覧下さい。既に見たように、「人生道中図」には色々な図柄のものがありますが、画面中央には必ず「六道の辻」が描かれるという点が、共通した大きな特色となっています。私は、この六道の辻の図像こそが、江戸時代の人々にとって、特に新鮮で興を催すものだったのではないかと考えています。

資料①をご覧下さい。「六道」とは、衆生が死んでは生まれ変わるということを繰り返しながら、永遠に巡り続ける6種類の世界、即ち、天界・人界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界のことをいいます。死後、それら6種の内のどの世界に赴くのかということは、生前の自らの行いによって決まるとされます。この「六道」という言葉は、古くから和歌の中にも詠み込まれてきましたが、中世期に入ると、「六道の辻」という言葉も用いられるようになります。初めは、「六道の辻」という言葉を、「六道」とほぼ同じ意味で使っていたようですが、時代が下るにつれて、死者が六道に分かれて行く或る決まった場所、という意味で使うように、固定化していったと考えられます。

続いて、資料②③④をご覧下さい。古来、小野篁が冥途へ交通した場所として伝えられている、京都の珍皇寺の本堂の前辺りの地面は、「六道の辻」と呼ばれて有名ですが、注意したいのは、たとえ「辻」という名が付いていても、ここに実際に目に見える道がある訳ではない、という点です。珍皇寺を描いた図版《4》②③をご覧頂くと、このことがはっきり確認できると思います。つまり、ここでは、「六道の辻」という言葉は、漠然と六道に「通じる」場所、

というほどの意味で使われているといえます。

続いて資料⑤をご覧下さい。ここにいう「六道の辻」は、珍皇寺の「六道の辻」とは違って、道の在る所を意味しています。ただ、その道の本数や形は明らかではありません。

このように、「六道の辻」という言葉は、中世以降ずっと使われ続けてきた言葉ですが、「六本の分かれ道」という意味は、必ずしももともと持ってはいませんでした。私の考えでは、「六道の辻」を、まさに文字通り「六」本の「道」として、目に見える形であらわしたのは、江戸時代の「人生道中図」が初めてなのではないかと思います。このような、言葉と絵を融合させたオリジナルな洒落は、江戸時代の人々の遊び心に大いに訴える所があり、その結果として、各種「人生道中図」が次々刊行されるという事態が生まれた、と考えられます。そして、「人生道中図」の流行以後は、「六道の辻」を6本の道としてとらえることが一般化していったようです。⑥から⑨に示した引用文や図版でご確認頂ければと思います。

その他に、6本の道として描かれた「六道の辻」の画像が広く認知された余波として、そのパロディー画も描かれました。それが⑩⑪です。

⑩の方は、分かれ道を2本増やして8本としたものに、しんにょうを付け加えて、「迷い」という字を形作っています。

⑪は、麻疹（はしか）が流行した文政7年に出された瓦版であり、病人が養生に努めるか努めないかで、全快するかどうかの運命が分かれることを教えているものです。画面中央に、「六道の辻」をもじった「毒道の辻」という名の分かれ道があります。

以上、駆け足でみて参りましたが、今後も引き続きこの「人生道中図」の調査に努め、現段階で保留にしてある問題、例えば、宝暦6年以前に「人生道中図」の作例があるのかどうか、などといった点についても言及していきたいと思います。

発表資料（レジュメ）

《1》「人生道中図」と関わりある先行研究

①、山下和正『江戸時代古地図をめぐる』（平成8年3月、NTT出版）

〈人生道中図〉人間の一生を旅道中にたとえて善悪の道を戯画として描いた一枚刷図で、庶民のための教訓的なもの。

※　道中図を〈道中絵巻図〉〈一般道中図〉〈街道道中図〉〈巡礼道中図〉〈目的地道中図〉〈講社道中図〉〈人生道中図〉に分類。氏所蔵の人生道中図1点掲載。

②、山下和正『地図で読む江戸時代』（平成10年10月、柏書房）

※　氏所蔵の人生道中図2点掲載。

③、中野三敏「沢田東江伝初稿（その二）」（『近世文芸研究と評論』14号、昭和53年6月）

○宝暦六年　丙子　二五歳

△正月『迷処邪正案内』を述作刊行する。

（中略）未翻印ではあるが、既に水谷不倒の『選択古書解題』に巻頭絵図一丁の写真を添えて記載されているので詳述しない。（中略）この宝暦六年には東江のこの作と全く同想同種の戯作が、しかも江戸と大坂と両地に於いて数点刊行されている。その一は『人間一生善悪両道中独案内』小本一冊、附図一舗。飛雄亭作。宝暦六年正月江戸刊。その二は『人間一生道中図』一枚。宝暦六年二月大坂刊。その三は文鳳堂稿本『宝暦風俗集』の中「同年（宝暦六年）正月より善悪みちしるべと申絵図の一枚摺出る。おおきにはやる。作者しれず。おって二冊ものに仕り板行せしなり」とあるもの。

※　宝暦６〈一七五六〉年１月刊『迷処邪正案内』（絵入り本）

→《２》①参照

※　宝暦６〈一七五六〉年１月刊『人間一生善悪両道中独案内』・付図

→《２》②参照

※　宝暦６〈一七五六〉年２月刊「人間一生道中図」（一枚刷）

→《２》③参照

※　宝暦６〈一七五六〉年１月刊「善悪みちしるべ」（一枚刷）→未詳

④、水谷不倒『選択古書解題』（昭和12年11月、奥川書房）

迷處邪正案内（中略）

又同年飛雄亭作に『人間一生善悪両道中獨案内』（別項）があるが、同じ様な構想のものが、どうして一時に出來たかといへば、それは秋里籬島の名所圖會流行の影響で、名所案内圖會式の作が、出たと見ねばなるまい。併しこれら「善悪邪正案内」が又好評を博した結果として、其後之に類する作品がいろ〳〵出來た。例へば京傳作『悟道迷所獨案内』、一筆庵作『善悪道中記』初・二・三篇及び「出世双六」の類、本書より構想を取得たものが少くない。（後略）

善悪両道中獨案内（中略）

本書は菎蒻式のもので、紙數僅に二十枚の小本、挿繪はないが、書中に繪圖に引合せて見るべしとあるから、口繪の所にでも、善悪雨（ママ）道中の圖があつたように思はれる。然るに此本には繪も圖もない。多分脱落したのであらう。

※　管見に入る限りの『人間一生善悪両道中独案内』三本の内、東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本には付図があるが、国立国会図書館所蔵本・狩野文庫所蔵本には付図がない。

《2》いろいろな「人生道中図」

①、国立国会図書館所蔵『迷処邪正(やす)案内』の口絵（墨刷・彩色）

※　刊記は「寶暦六丙子正月吉日／東都書林／神田鍛冶町壹丁目　燕屋彌七／淺草御藏前　横田屋半治／神田八軒町　彫工　小嶋茂八」

※　構図からみて、既成の折本型の図をもとに、冊子本口絵に仕立て直したものかとも思われる。

②、東京都立中央図書館加賀文庫所蔵「人間一生善悪兩繪圖（袋の手書題）」（一枚刷、墨刷・彩色）

※　この図について、同文庫目録は「善悪兩道中獨案内の付録」としている。

※　小冊子『人間一生善悪両道中獨案内』の刊記は「寶暦六載丙子正月飛雄亭藏／東都書林／萬屋源三郎／大坂屋平三郎」

③、架蔵「(無題)」（一枚刷、墨刷・彩色）

※　刊記は「宝暦六子年二月／長岡玉蘭臺／摂陽書林／野村文煥堂」

※　『享保以後大阪出版書籍目録』には、冨士屋長兵衛（本姓が野村、堂号が文煥堂）が「人間一生道中圖一枚」の出版を「寶暦六年二月二十五日」に出願し、その後「諸人一代道中圖」と改題して「寶暦六年三月」に再出願したとされている。

④、刈谷市中央図書館所蔵「人間一代道中記」（一枚刷、墨刷）

※　山下和正氏所蔵図（無題、図柄は同じ）には「寶暦六丙子二月出来／寛政六甲寅三月再板」と刷られている。

⑤、山下和正氏所蔵「にんげん教訓身上道中記(いつしやう)」（一枚刷、墨刷）

（左欄）　心　よきにによ　あしきににるな　をしなへて人の心ハじざいかぎなり

※　刊記なし。

※　図の左肩に、心学の道歌を記した施印の札らしきものを取り込んでいる。→《5》参照

⑥、東京都立中央図書館加賀文庫所蔵「御一代身の上のかんべん」（一枚刷、色刷）

（角書「しやれざるハやぼのあやまり也／しやれすぎるハ通のおこたり也」）

※　刊記なし。

※　川によって平原が6区画に分けられ、6本の道よりも川の方が目立つ。→《6》①参照

《3》一枚刷「人生道中図」の流行

①、『諸人一代道中図之解』（明和8〈一七七一〉年刊、富士屋長兵衛作〈遺稿〉、富士屋長兵衛の七回忌記念出版）

※　『諸人一代道中図之解』の草稿の成立は宝暦年間末期以前。

○序文

古人冨士屋長兵衛。估ふ帙策の中に於て。すこしく理を窮め。物を格し。それがあまり。人世の我他彼此をいはんとて。諸人一代の圖画によりて見解をなす。其言と趣向のおどけたるハ。常の滑稽なる。人能しる所なり。

○挿絵「諸人一代山川之圖」の注

諸人一代道中之図前ニ出板モトメ可見

○巻末出版目録・刊記

諸人一代道中圖　全一冊（此書人間一生の善悪を画にあらはし童蒙の教とす平生熟覧すへし）

明和八辛卯正月　　浪華書舗　野村文煥堂板

②、『大増書籍目録』（明和9〈一七七二〉年刊、京都武村新兵衛）「圖」の部

一　　諸人一代道中圖　　※　「一」は「一枚」の意。

③、『享保以後江戸出版書目』より

天明六丙午冬

善悪道中独案内　再板全一冊　墨付十九丁半　外ニ絵図壱枚添　板元売出し大坂屋平三郎

④、『絵本諸人道しるべ』（寛政10〈一七九八〉年刊、清克徳著、下河辺拾水・速水春暁斎画）

○序文

是に人間一生道中記といふ圖あり　何人の作といふ事をしらず　専ら童蒙をして善を勧め悪をしらしめとこしなえにたのしミをきわめ壽永からしめんとするの手便にて書肆何某此圖を損益して絵草紙たらんをこふ　予辞するといへとも聞かす　止む事を不得して其画圖を指麾す

○巻末出版目録

人間一生道中記（折本／二枚摺）　是ハ人間一生の善悪を道中記になぞらへよき道をしらしむる

人間道中之大繪圖（さいしき入）　右に同し大絵圖也

諸人一代道中圖之解（全部一冊）　此書ハ人間一生道中のかうしやくを記し童蒙の教訓にそなふ

絵本諸人道しるべ（全部二冊）　諸人一生の善悪を絵にしてあやうきをのぞくおもしろき書也

○刊記

寛政十戊午年正月　　京松原西洞院東ぇ入　美濃屋平兵衛板

※　折本は、一般の道中図によくみられる形式。天地が短く長尺の図を折りたたんだもの。

⑤、『人間一生独案内善悪道中記』（天保15〈一八四四〉年刊、一筆庵主人（渓斎英泉）作・画）序文

原本善悪道中記ハ飛雄亭の著述にて大に世に行れしと云　宝暦六年丙子の春の板也　絵圖と小冊と合見るやうに綴て発市す　其後

天明寛政の比に至り桃栗山人柿發斎（元祖立川焉馬の初名なり）大通獨案内と題して飛雄亭の作意に倣ひて絵圖と冊子と合見るやうにせし戯作あり　また山東京傳戯作にて悟道獨案内といへるも是等の草子に基きしもの也（芥子主人所蔵）　先哲の妙案きハめてよしといへども星霜うつりかハりて流行當時の人情にあハぬ章も少からず　今将其趣向によりて戯作せし拙著也

※　「大通獨案内」と題する図・冊子ともに未詳。

※　同様の内容が続編の序文にも記されている。

⑥、『歌舞伎年表』宝暦六年

○十月、京、染松座、「人間道中記」。松下嘉平次（十藏）娘おつう平産と聞き慌てる思入。静にて可笑味あり。

※　『国書総目録』には、「人間一生道中記」「宝暦六初演」「京阪歌舞伎年表による」とある。

《4》「六道の辻」という言語表現と「六道の辻」の画像

①、『岩波仏教辞典』（平成元年12月）「六道」の項

衆生が自ら作った業によって生死を繰り返す六つの世界．（中略）gatiは，動詞√gam（行く）に由来し，〈行くこと〉〈道〉が原義で，〈道〉〈趣〉と漢訳されるが，六道の場合は〈境涯〉〈生存状態〉の意．（中略）11世紀には，六道のそれぞれに地蔵がいて衆生を救うという六地蔵信仰が成立し，鎌倉時代以降には賽の神・道祖神信仰とも習合し，辻や墓地の入口には6体の地蔵がおかれた．そうした辻は，死者が六道に分れ行く場と考えられ，〈六道の辻〉〈六道の巷ちまた〉と呼ばれた．

②、地誌『都名所図会』（安永9〈一七八〇〉年刊、秋里籬島著・竹原信繁画）巻二「珍皇寺」の挿絵

篁堂にハ小野篁の像を安置す（此所より冥土へ通し道なりとそ）（中略）六道辻（本堂の前にあり）　当寺ハ久代平安城の葬所なり

③、読本『小野篁八十島かげ』（文政２〈一八一九〉年刊、是水叟菊亮作・速水春暁斎画）巻七ノ下　９丁裏・10丁表の挿絵

満米上人衆生を教化し玉ひし五条坂の六道ハ篁卿冥途に通ひ玉ひしところといふ　其餘波とて今の六道の図をうつす

④、黄表紙『六道水車智恵篁』（安永４〈一七七五〉年刊、鳥居清経画）

らくぐわい六どうのつぢのあなよりめいどへかうつうし　ひくれにハちにいりよあけにハまたしやばへかへりたもう

⑤、狂言「八尾」冥土に赴く者のセリフ

「イヤ、來るほどに道あまたある所へ參った。さだめてこれは娑婆で承った六道の辻でござろう。」

（『日本古典文学大系　狂言集下』）

⑥、黒本『和田合戦朝比奈地獄破』（宝暦13〈一七六三〉年刊）　９丁裏・10丁表の挿絵

さてハをれハちこくへをちたそうな　これがをとにきいた六道のつぢとやらか

※　管見に入る限りでは、「人生道中図」以外で、六道を六本の道として表現した最古の図例。

⑦、洒落本『大通禅師法語』（安永８〈一七七九〉年刊）　10丁裏・11丁表の挿絵

⑧、黄表紙『当世大通仏買帳』（天明元〈一七八一〉年刊、芝全交作・北尾重政画）

ちぞうぼさつハ六どうのミちにたち玉ふがとかく今ハあつさりといきにしてものごとけんやくにするがはやるとおぼしめし六どうのミちを四すじへらしてめぐろとしな川とへわかるゝ二すじのミちにたち玉ひ

⑨、黄表紙『狂伝郭中和尚法語九替十年色地獄』（寛政３〈一七七四〉年刊、山東京伝作・鳥居清長画）６丁表の挿絵

⑩、黄表紙『福寿海無量品玉』（寛政６〈一七七七〉年刊、曲亭馬琴作・北

斎（春朗）画）　12丁裏・13丁表の挿絵

わしハまよひ（迷）といふじ（字）のミちにいます

⑪、瓦版「文政七申とし新板はじか名所圖絵」（文政７〈一八二四〉年刊）

どく（毒）道の辻　つゝしむべし

《５》「人生道中図」と心学

①、『心学道歌集』（天保４〈一八三三〉年刊、大島有隣編）

よきに似よあしきに似るななべてよの人の心ハ自在かぎなり

②、『教訓古今道しるべ』（天保８〈一八三七〉年刊、小野弘度編）　57丁表の挿絵

白河侯定信賛　　よきに煮よ　あしきににるな　鍋てよの人の心は自在鍵なり

③、『家内安全富貴繁栄丸』（刊年不明）　９丁裏の挿絵

よきに似よあしきににるななべて世の人のこゝろは自在鍵なり

《６》「人生道中図」と仏教絵画「円頓観心十法界図」

①、架蔵「世教訓心の六道」（大正元年10月刊）（一枚刷、藍色刷）

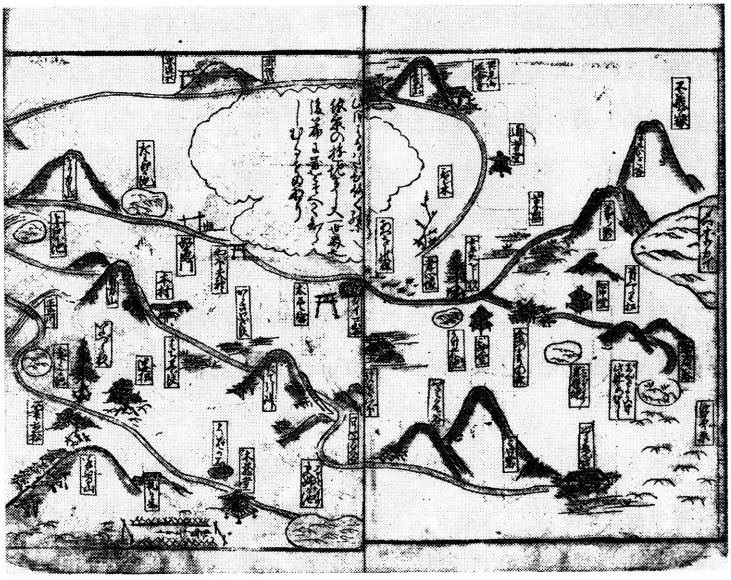
※　中心部から放射状に伸びる線によって平原が６区画に分けられている。

→《２》⑥参照

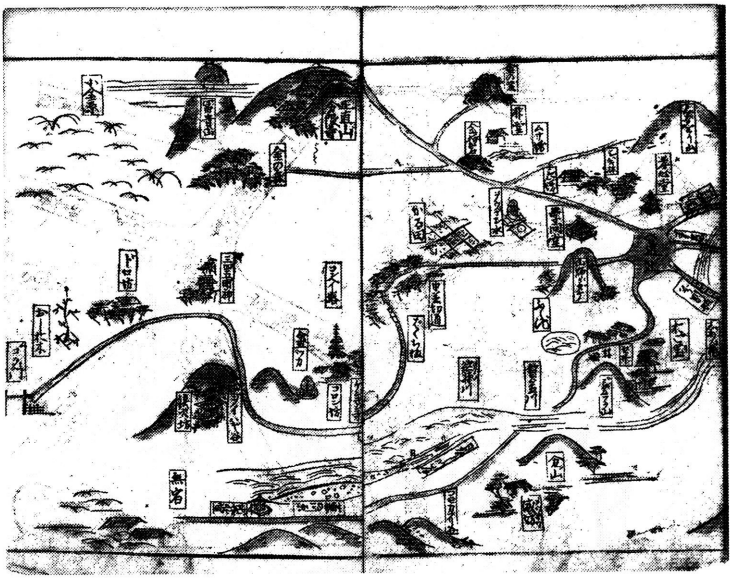
②、架蔵「円頓観心十法界図」（刊記なし）（一枚刷、墨刷）

※　「円頓観心十法界図」に関する拙稿……「円頓観心十法界図」についての一考察――図の源流をめぐって――（『絵解き研究』15号、平成11年６月）

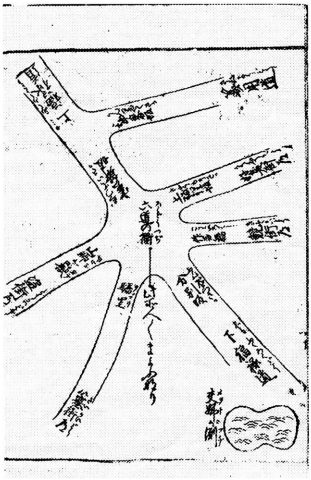
【参考図版】



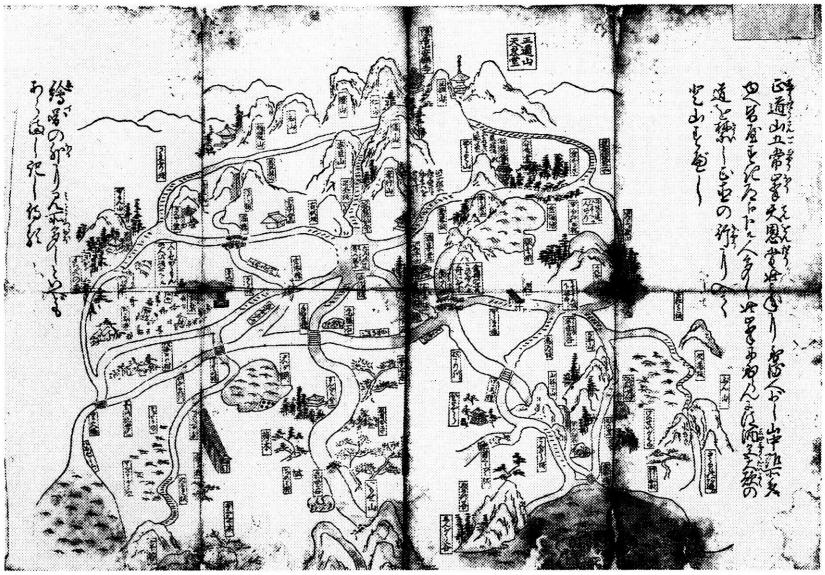
《2》①A



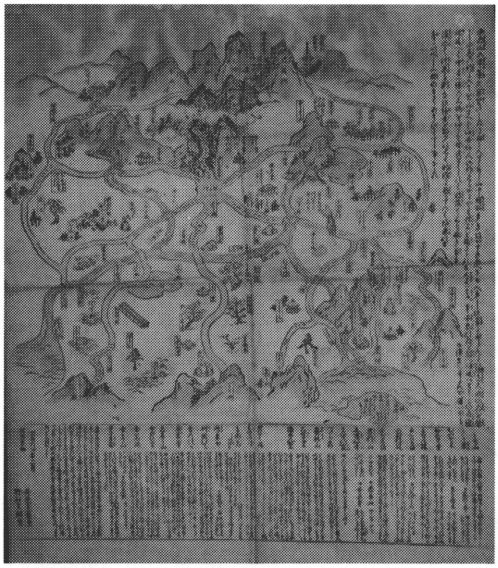
《2》①B



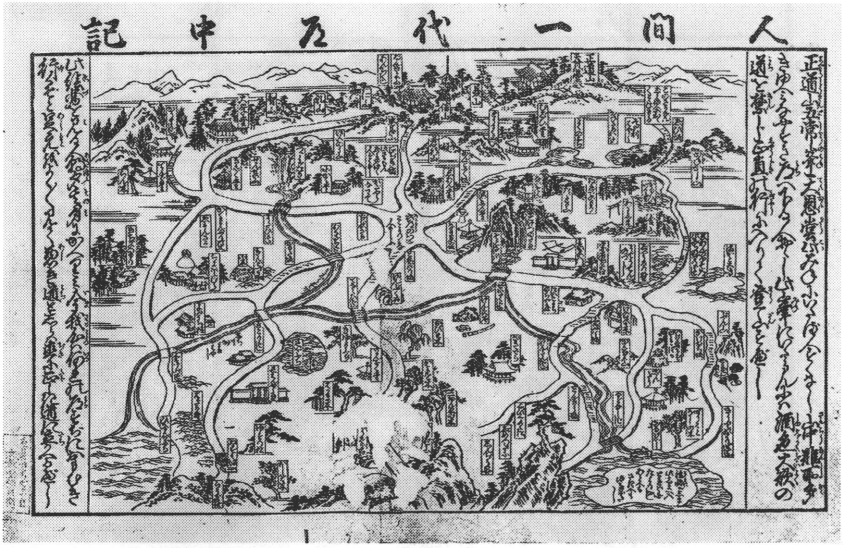
《2》①C



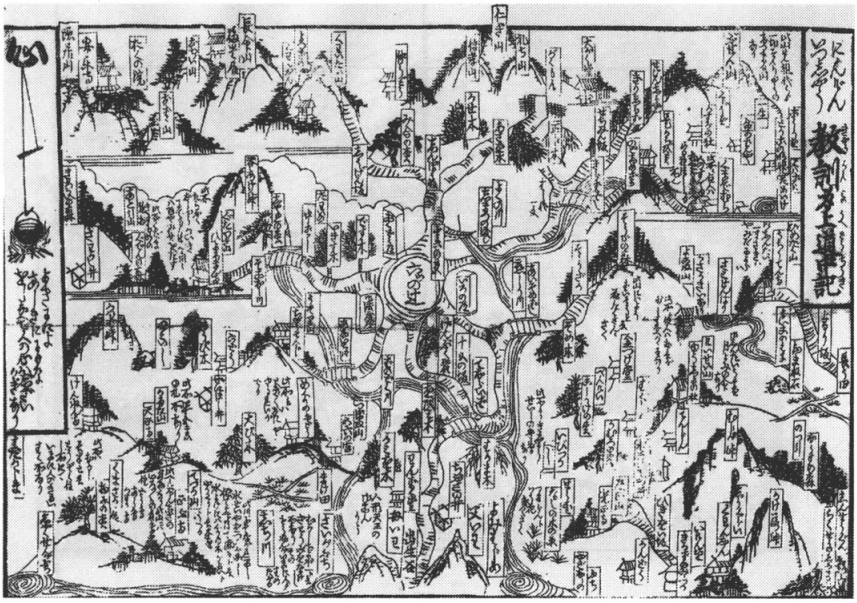
《2》②付図



《2》③

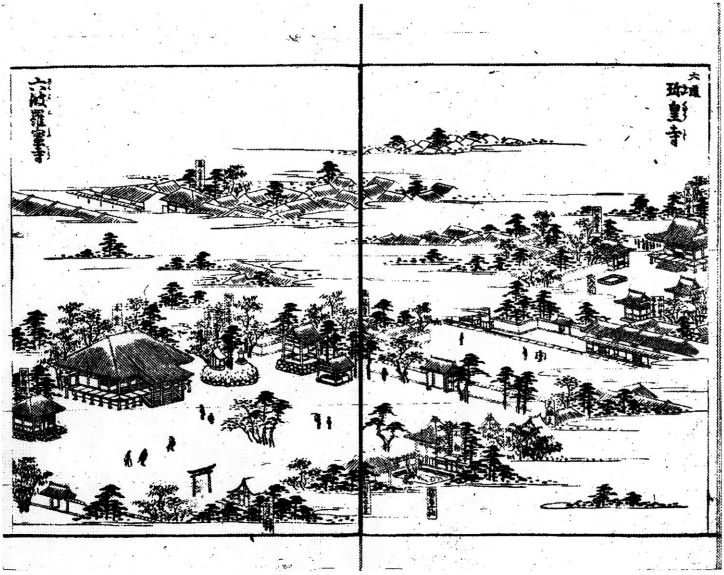


《2》④

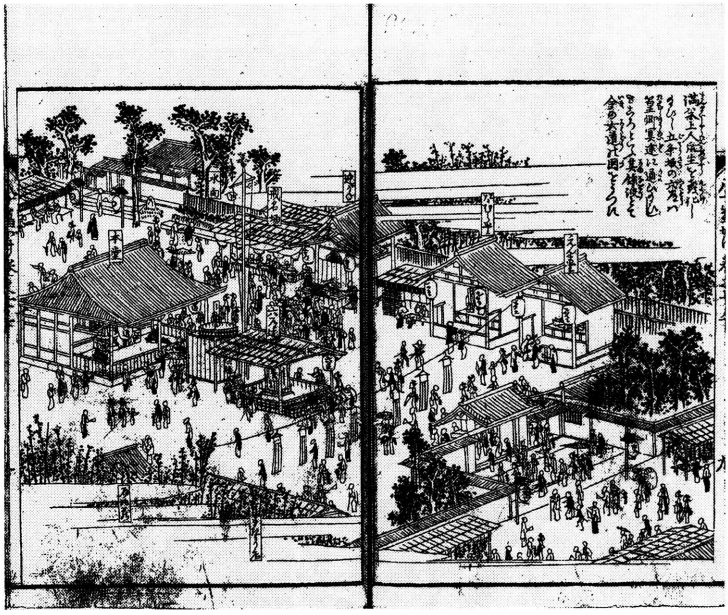


《2》⑤

《2》⑥



《4》②



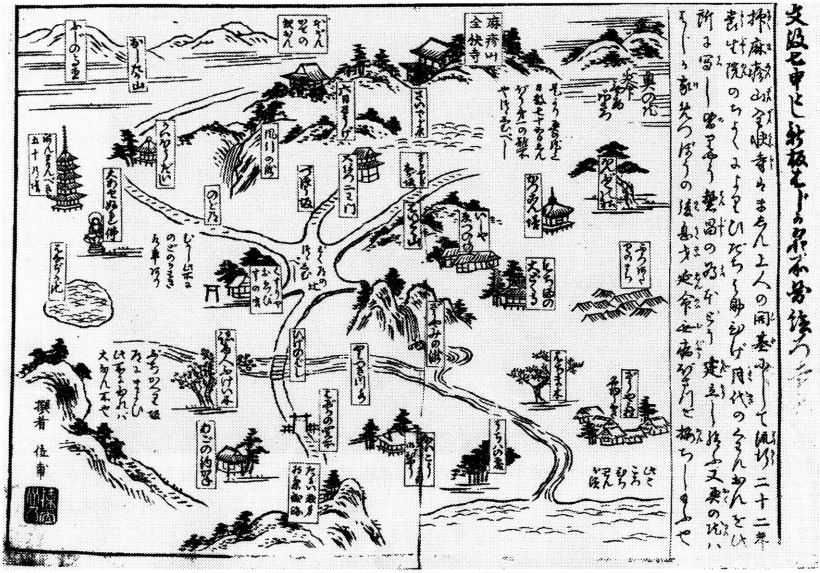
《4》③

《4》⑥

《4》⑦

《4》⑨

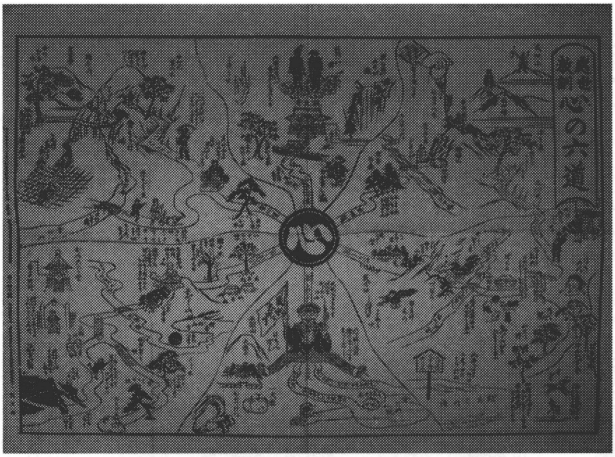
《4》⑩



《4》⑪

《5》②

《5》③



《6》①

《6》②

図注

《2》①ＡＢＣ、《4》②、《4》③、《4》⑨、《4》⑩……国立国会図書館所蔵
《2》②付図、《2》⑥、《4》⑦……東京都立中央図書館加賀文庫所蔵
《2》④……刈谷市中央図書館所蔵
《2》⑤……山下和正氏所蔵
《4》⑥……大東急記念文庫所蔵
《4》⑪……大阪府立中之島図書館所蔵
《5》②、《5》③……東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵
《2》③、《6》①、《6》②……架蔵

付記

口頭発表の後、海野一隆氏の御論考「たわむれ地図のはしり」(『日本古書通信』815号、平成９年６月）を知り、参考にさせて頂いた。(山下和正氏の御教示による。）海野氏は、飛雄亭の『人間一生善悪両道中独案内』の付図に関して考察しておられ、私の発表内容と一部重なる部分がある。(「六道の辻」については、言及しておられない。）遅ればせながら、本発表の先行研究として、ここに挙げさせて頂く次第である。

＊討議要旨

福田秀一氏は、時間の関係で略された「人生道中図」と心学との関係、また人生双六への影響について補足して欲しい、と求め、発表者は、心学では施印というものを配るが、それを集めた施印集が刊行されていて、その中に《2》⑤の左欄と同様のデザインのものを見つけた、人生道中図の教えと心学の教えは共通するので、人生道中図そのものが施印に使われたとも考えられる、人生双六はむしろ十法界図からの影響が強い、と答えた。

ロバート・キャンベル氏は、『迷処邪正案内』は地誌のパロディで、人生の破滅にむかう悪い方向の道ばかり載っているが、ポジティブなパロディはなかったのか、と尋ね、発表者は、続編にいい方向に行くものを出す予定だったのではないか、と答えた。また、キャンベル氏は、人生道中図に似た山東京伝の「欲の獣」の一枚刷がケンブリッジ大学図書館所蔵の貼込帳にあり、それなども参考になるのではいか、と指摘した。

小池正胤氏は、文政七年のはしか絵には「諸商人ふけい木（不景気)」とあり、鯰絵などとつながっていくような、社会の状況の反映を読み取れるのではないか、と尋ね、発表者は、この図については「六」と「毒」を懸けたパロディとしてしか見ていなかったので、今後考えていきたい、と答えた。